ISSN　1342-4866

山形大学附属博物館報42

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY　　２０１６．３

目　　次

山形大学附属博物館リニューアル･オープンまでのあゆみとその概要…… 八　木　浩　司(1)
Before&After山形大学附属博物館 ……(4)
開館特別展「山を見るひと」…… 佐　藤　　琴(5)
平成27年度事業報告 ……(6)

山形大学附属博物館リニューアル･オープンまでのあゆみとその概要

八　木　浩　司(館長)

山形大学附属博物館は2015年11月27日にリニューアル・オープンしました。それまで小白川図書館３階の一角で展示・学芸業務を行っていましたが、2014年秋竣工の人文学部１号館１階に場所を移して開館しました。学外の方に分かりやすく言えば、新博物館は山形大学小白川キャンパス正門からロータリーを挟んで南西側建物１階に位置しています。また、新博物館には人文学部正面入り口脇からガラス張りのプロムナードで誘導される独立した専用入り口を備え、休日でも大学正門から直接館内にご案内できることになりました。

博物館外観

旧博物館　展示室入口

一旦立ち戻って、山形大学附属博物館の歴史と概要を述べさせていただきます。当館の前身は、昭和初期からあった県立山形師範学校併設の「郷土室」にまで遡れます。その機能は1944年発足の官立山形師範学校に受け継がれ、1949年の山形大学発足と同時に教育学部附属博物館となりました。1952年には「博物館相当施設」の指定を受け、山形大学附属郷土博物館として発足しました。1965年には中央図書館（現小白川図書館）改築に伴いその３階に移転、1978年に山形大学附属博物館と名称を改め今日に至っています。当館は、地学・生物学関連の自然科学から歴史学・考古学・民俗学関連の人文科学そして美術作品までの３万点に及ぶ収蔵資料を有する総合博物館です。収蔵資料は、本学の前身である旧師範学校や旧制高等学校時代からのものも多数あり、山形県指定有形文化財も含ま

れます。また、近世地方文書が多いことで知られ、村落や民衆レベルで繰り広げられてきた当時の社会・世相を明らかにしようとする歴史学や経済史の研究者に広く利用されて参りました。しかし、狭溢なスペース故に、それらを十分に展示しきれない状況が長く続いていました。このような状況を打破すべく、歴代館長によって施設の拡張・充実要求がなされて参りましたが、最近30年余り学内の他施設案件の陰に隠れて実現には至りませんでした。

転機が表れたのは2012年４月になってからです。学芸員養成課程が改められることに対応して、博物館実習実施スペース確保のための事務局側との協議を進めるうちに、博物館の将来構想検討指示が大学本部よりなされました。同年夏、前・結城学長から本部庁舎１階への移転提案があり、具体案の作成を開始しました。そして2013年１月には、2012年度補正予算で耐震改修に伴う人文学部１号館増築部１階への附属博物館移設が認められました。建物は2014年８月末竣工しましたが、１年後の2015年秋のリニューアル・オープンを目指して、予算確保など学内での調整が始められました。

ところで、大学博物館の機能には以下の３つを挙げることが出来ます。一つ目は、学術資料・標本の安定的保存・管理、二つ目は、収蔵資料の実証的教育および研究への提供、三つ目は大学の知的財産や研究成果の社会的還元です。従って展示および収蔵スペースの確保などハードウェアの拡充と、リファレンス・サービスの強化、博物館学教育カリキュラム立案と実施さらに常設および企画展示の立案・実施などのソフトウェア的機能の充実が求められます。さらに当館は２つの機能を担っています。それらは、地域文化の伝承館としての機能、そして分散キャンパス型大学としての山形大学・学生に山形を知ってもらう場、すなわち山形に学ぶ学生へのアイデンティティ形成機能です。以上の機能を織り込みながら新しい博物館を創り上げる作業が開始されました。新博物館のスペースは、表１に示された通りです。

施設概要	
展 示 室	４７２㎡
収 蔵 庫	１７５㎡
閲 覧 室	１９㎡
事 務 室	３６㎡
延床面積	７０２㎡

表1.　新博物館スペース内訳

旧館では資料整理室を収蔵スペースに転用していましたが、古文書など温度・湿度管理が要求される専用の収蔵庫を含め、用途別に３つの収蔵庫をまず確保することになりました。それらは貴重資料用、古文書用、そして一般収蔵庫です。次に来訪研究者用の資料閲覧スペースも確保されました。

展示スペースは、旧館の約1.7倍の面積となりましたが、天井板を設けず建物躯体内部全体を利用することで空間的にはより広く感じられます。人文学部からは自立した施設とするため館内にバリアフリー・トイレを設置しました。

展示室は、まず本学にお出でいただいたお客様に山形大学の歴史を知っていただくコーナーで始まります。そして各学部での現在の研究・教育が分かるバナーが掲示されています。

各学部紹介バナー

自然科学コーナーでは、山形の地形・地質・大気・生物が順に資料やパネルで展示されています。しかしそのコンセプトは、地域的現象の紹介に留まるものではなく、山形の大地を通して地球を理解することが出来ることです。また、県内産出の700－600万年前のクジラの化石や珪化木を直に手で触ったり、山形の地形を３D画像で見て、これまで知らなかった新たな山形

のイメージを持っていただいたり、あたかも空に舞うかのように空中展示された野鳥剥製に驚かされたりするような工夫がなされています。

考古学コーナーでは、まず当館のイメージキャラクターとなっている縄文晩期の結髪土偶が皆様をお出迎えしてくれます。山形県指定有形文化財の縄文・弥生土器の脇には弥生時代の頭蓋骨が異質な輝きを示しています。長谷堂城門扉をくぐると近世の山形城下に降り立つことが出来ます。山形の特産品であった紅花、青苧の紹介や江戸期上方と山形を結んだ最上川舟運に関する展示を通して、当時から頑張っていた山形の姿をうかがい知ることが出来ます。

近現代の山形の発展や当時の山形の町並み、農村景観を三島県令道路改修記念画帖から読み取って行く頃には少し疲れを感じられることかと思います。そんな時は、美術・工芸コーナーで、ゆったり美術品をご鑑賞下さい。腰をかけられた新聞紙で作られた椅子も本学芸術造形コース・齋藤学准教授による作品の一つです。

齋藤学准教授による新聞紙で作られた椅子

木製プロペラ

博物館事務室脇には、大きな木製のプロペラも展示されています。大正時代に爆撃機のプロペラとして制作されたもので、漆塗装された色合いそして木材の質感とその曲面が描きだす艶めかしさは、これを現代にも通ずる工業アートにしています。

2015年５月に移転に向けた準備作業のため博物館は休館とし、６月から収蔵資料の移転作業も開始しました。８月はじめのオープンキャンパスでは、大学紹介コーナーと美術作品の展示で部分開館し、博物館実習が終わった10月から新しい展示に向けた作業が本格化しました。

新館へ移動中の資料

しかし、作業を進めれば進めるほど様々な問題が起き、それらを解決しながら別の作業を進めることが求められました。全ての展示準備作業が終了したのは、内覧会当日の早朝でした。まさに疾風怒濤の準備作業終盤、学芸研究員の教員や院生・学生はもちろん、勤務を終わった異なる部局の職員までが作業をお手伝い下さいました。

長谷堂城門扉のための展示台づくり

予算処置にご尽力いただいた学長、担当理事以下オール山形大学で新しい博物館は開館できたと言えます。

当館は、開館後の２ヶ月で2,700人以上の来館者をお迎えしています。学外一般の方々の来館が増えたことも視認できます。旧館の平均的な来館者数が3,500名／年（平成20年から26年までの入館者数より算出）であったことや、リニューアル・オープンでご祝儀的な数が含まれることを勘案しても、正門に最も近い施設として、地域に開かれた博物館としての機能が与えられたと実感しています。

最後に、当館の抱える今後の課題についても自戒的に述べる必要があります。一つは、ほとんどの解説は日本語表記のみで、大学博物館としてふさわしくない状況にあることです。電子メディアの活用も図りながら英語及びアジアの言語での多言語表記を進めていかねばなりません。二つ目は、解説員を配置出来ていないことです。予算の制約上、博物館に関心のある学生へ働きかけ、学生サークル的な組織で解説ボランティア活動を進められないか模索しているところです。まずは何となく学生が博物館にやってくる、知的な溜まり場的スペースを設けることから始めようとしています。三つ目は、展示が陳腐化しないような努力を怠らないことです。特別展、企画展、公開講座などの開催を通した活動を行って参ります。皆様からの厳しいご意見をいただきながら学内や地域から愛される博物館に進化させることが新博物館に与えられた使命です。

リニューアルオープン
特別展ポスター

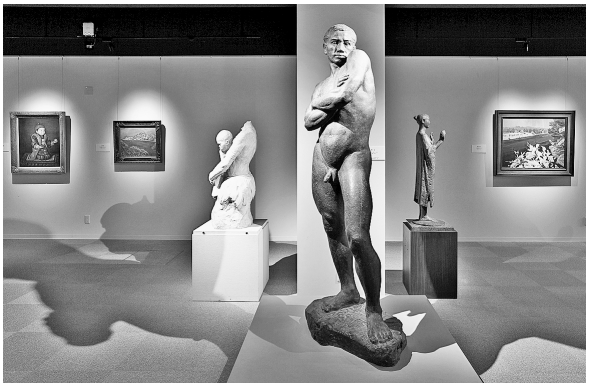
Before & After
山形大学附属博物館

2015年11月27日にリニューアルオープンした博物館の過去と現在を一挙公開！

ケース内に整然と並ぶ標本群

館内拡充により、ストーリー性のある
展示が実現しました。

大きな作品・資料が展示されていた
美術・工芸コーナー



スポットライトを導入。光による演出が
作品の魅力をよりいっそう引きたてます。

収蔵展示のため全体的に狭かった通路

ゆとりをもった通路スペースを確保。
長谷堂城門扉のような大きな資料の展示が
可能になりました。

開館特別展「山を見るひと」

佐　藤　　琴（学芸研究員）

会　期：平成27年11月27日（金）～
　　平成28年１月29日（金）　47日間
休館日：12/26～1/3、1/9・10・11、15・16・17、23・24

本展は山形に生きる人々にとって昔から身近な存在である山に対する人々の眼差しの変化を物語る絵画を集めた特別展である。展示構成は以下のとおり。

展示構成

（１）畏敬の眼差し
　「湯殿山道中略図」
　（山形美術館蔵･山形大学附属博物館蔵）
　五雲亭貞秀「陸奥出羽名所之図」
　（文翔館蔵）など６点

（２）発見された風景
　高橋由一「三島県令道路改修記念画帖」
　（山形大学附属博物館蔵）
　高橋源吉「最上川古口風景」
　（個人蔵）など13点

（３）地形を解き明かす・五百澤智也
　五百澤智也「槍・穂高連峰」
　同　「マナスル三山とラルキャ･ヒマール」
　（個人蔵）など14点

特別展「山を見るひと」展示風景

開館特別展は、新博物館の使命と理念を対外的に表明する重要な機会である。今回は総合大学の附属施設という当館の特色を強く打ち出すこととし、専門分野の異なる学芸研究員３名（地理学・日本近世絵画史、近代美術史）の協働によるものとした。展示構成のとおり、特別展会場には浮世絵版画、明治時代の油彩画、現代の山岳鳥瞰図が一堂に会することとなった。「山」というテーマで集められたそれらは、小白川キャンパス（人文学部・地域教育文化学部・理学部）に集う人々の多様な関心に応えつつ、新たな興味を引き出す内容となったと自負している。なぜなら、本展担当学芸研究員にも学術上の発見がいくつかあり、異分野融合による刺激を大いに受けたからである。

また、期間中に下記のとおり関連行事を実施した。

（1）シンポジウム「景観の何が人をひきつけるのか　文学・美術・科学の視点から」
・日時　平成27年11月28日（土）13:30～16:00
・パネリスト
居駒永幸（明治大学経営学部公共経営学科　教授）
岩田修二（東京都立大名誉教授）
佐藤　琴（山形大学附属博物館学芸研究員・講師）
・コーディネイター
八木浩司（山形大学附属博物館長・教授）
・参加人数　50名
（2）ギャラリートーク
①月山マイスターによる展示解説
・日時　平成27年12月12日（土）、19日（土）13:30～
・参加人数　12日 10名、19日 10名
②高橋由一・源吉の作品解説
・日時　平成27年12月５日（土）13:30～
・講師　小林俊介（地域教育文化学部教授）
大場詩野子（絵画保存修復家）
・参加人数　35名

特別展「山を見るひと」シンポジウム

特別展「山を見るひと」高橋由一・源吉の作品解説

開館日翌日の山形新聞１面にとりあげられたことや、山岳関係者への広報物の配布などが功を奏し、特別展および関連行事に学外の方々も多数来館された。今後も当館の特色を生かした特別展活動を実施していきたい。

平成26年度来館者統計

一般成人	個　人	1,181人
	団　体	99
大　学　生	個　人	2,992
	団　体	155
児童・生徒	個　人	202
	団　体	642
合　　計	個　人	4,375
	団　体	896
	総　数	5,271

※　オープンキャンパスでの入場者は含まない

平成27年度来館者統計

来　場　者	個　人	2,905人
	団　体	299
	計	3,204

※　2015年4月1日～30日、11月28日～2016年1月31日までの統計
※　新館移転に伴い来場者の統計区分を変更

平成27年度事業報告

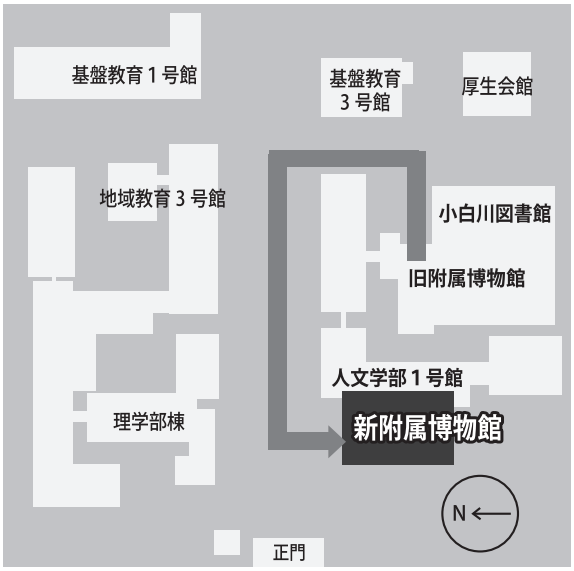
平成27年度に本館で実施した博物館実習の単位修得者数は下記のとおりです。

（単位：人）

学　　部	人　　数
人　文　学　部	21
地域教育文化学部	7
理　　学　　部	18
科目等履修生	2
計	48

お知らせ

山形大学附属博物館は平成27年11月27日に新築移転いたしました。場所は小白川キャンパス内、正門から向かって右手前人文学部１号館１階です。



附属博物館では、所蔵資料を授業等で利用していただけるよう、協力体制を整備しています。
お気軽に職員までご相談下さい。

山形大学附属博物館報　No.42　　2016. 3 発行
編集兼発行人　山形大学附属博物館
〒990−8560　山形市小白川町一丁目4−12
（TEL）023（628）4930（直通）
（FAX）023（628）4668
URL　http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/
E-MAIL　hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp